

杉本 つとむ 著

西鶴語彙管見

ひた く 書 房

昭和 57 年 2 月 20 日 印刷
昭和 57 年 2 月 28 日 発行

西 鶴 語 彙 管 見

定 価 七 八 〇 〇 円

著 者 杉 本 つ と む

発 行 者 井 上 了 貞

印 刷 者 田 中 忠 男

発 行 所

ひ た く 書 房

〒 144 東 京 都 大 田 区 南 蒲 田 二 一 八 一 五
電 話 〇 三 一 七 三 八 一 一 五 九 三 番
振 替 東 京 〇 一 八 七 三 四 七 番

ISBN4-89328-009-0 C3092 ㍶7800E

まえがき

西鶴のことはを考えて約二十五年。その西鶴のことは森にはいりこみ、今日までおだやかな日は一日としてなく、樹海をさまよい、時に木もれ日に一息やすらい、また果しらぬ老樹・若樹の間を羊腸ならぬ迷路を右折左廻しつつ、ままならぬままにいつしか天命をすぎ、杖つく年の門出を迎えることとなった。ちやうど西鶴死歿と同じ五十有二歳を期して、この拙稿をまとめることとした。しかしまことに天道ものいわずして、四方に恵みふかして、筆をやすめ、ことばのバトスとロゴスに快よく憩うオアシスがあった。西鶴文学の権威、世の人心、学生の心のうちを急察して、行住座臥、西鶴のことは一滴を常に与えておしまれぬ学びの師、暉峻康隆先生である。昭和二十八年、大学を卒業して二年目、至文堂の「国文学解釈と鑑賞」への小論を御推薦いただいて、あぶなつかしいわたくしの西鶴のことばの探究の長いロードの出発とはあいになった。コトバの研究は終りなきマラソン、孤独なる一人旅にも似る。されど師への感謝の念、一日も忘れず、ひたすらこの道へ一筋の努力をかさねてきた。

西鶴をどうやらまがりなりにも知ったのは早稲田大学を卒業するころからで、それまで多少作品は読んでいたものの、誤解と曲解、いや未知、無学の徒にすぎなかった。西鶴を知ったことは無上の幸である。西鶴は日本語の錬金師であり、西鶴という大木からにじみ出る樹液はまことに八方芳香をただよわせ、人を美遊に誘なり。また時には異臭を放つ。芭蕉なれば、へ肥のいきれを吹きはなちともいわんか。生来、酒もたばこも飲めぬわたくしが、西鶴の下戸たるを知って、いっそう親近感を覚えたのも事実である。加えて西鶴のニックネーム、阿蘭陀流に通じて、わたく

しもここ十数年、江戸時代のオランダ語を研究する蘭学の徒と身をやつたことである。

しかしそれにしても、ことばは呪術である。いつしか西鶴のことばの魔性に身も心もとりつかれてしまった。ここに集めて一巻とした論考は、いわば西鶴という金城鉄壁の堅い砦を攻撃し、幾度かはねかえされた二十余年にわたるわたくしの西鶴城挑戦への報告記録である。

昭和五十六年十月吉日

著 者

目次

はしがき

西鶴語彙研究の序章.....一

井原西鶴を弔ふ文.....六

I 構文・語法.....九

一 西鶴を読む文法.....一一

(一) 断続のあり方.....一二

〔A〕 (1) 断止のあり方(三) (2) 照応による文結のあり方(四)

〔B〕 (1) 接統のあり方(五) (2) 接統のあり方―特にへてについて(六)

(二) 省略のあり方.....一八

〔A〕 格を示す助詞の省略(一)

〔B〕 助詞それ自身の省略(二)

(三) 文の構造と叙述の一端.....二二

II 西鶴の構文と語法.....二五

目次

四

- (1)——1 短句構成の長文(三) 2 体言中止・連用中止法による接続(二七) 3 修飾句↓主文(三八) 4
点描法(三九) 5 てによる接続(三九) 6 となり(四〇) 7 ぞかし・ける・し(四一) 8 省略につい
て(四二) 9 文末の助詞(四三) 10 雅俗融和の文章(四四) 11 地と会話との区別がない(四五) 12 古典
の俳文化(四六)

- (2)——1 接辞(三八) 2 名詞(三八) 3 代名詞(三九) 4 副詞(四〇) 5 形容詞(四一) 6 動詞(四二)
7 助動詞・助詞(四三)

三 西鶴の文章とその文脈——〈ぬけ〉の吟味をとおして……………四八

- (1)——創作の態度の一面(四八) 俳諧的ということ(五〇)

- (2)——考察(五一)

- (3)——『世間胸算用』の吟味(五二)

四 西鶴の文章論的考察……………六九

- (1)——文章の構造 文章のパタン(六九)

- (2)——省略と破格(七〇) 散文化の方法(七一)

五 西鶴における敬語の考察……………七九

- A 対遇関係について……………八〇

- 人称代名詞の用法——(イ) おれ(八〇) (ロ) わたくし(八一)
(ハ) 拙者(八二) (ニ) こなたさま(八三)

- B 敬語用法の実際——西鶴の敬語用法……………八四

六 西鶴における人称代名詞の考察……………九一

- (A) 自称——(1) われ・われら(九一) (2) わたくし(九二) (3) みづから(九三)
(4) み・みども(九四) (5) わがみ(九五)

Ⅱ 文体・用字法・かなづかい……………一四五

七 西鶴・ことばのスタイル——共感の散文芸術……………一四七

- | | | | | |
|-------------------------|---------------------------|--------------------|--------------|----------------------|
| (1) ———— ことばを支えるもの(二四七) | (16) その子(四〇) | (17) あなた(四〇) | (18) お手前(四三) | (19) 足下(四三) |
| (2) ———— 充足のスタイル(二五二) | (10) 汝(二四) | (11) 御身(二三) | (12) 御自分(二七) | (13) ありさま(二三) |
| (3) ———— はなしのスタイル(二五五) | (5) そち(二三) | (6) かたさま(二三) | (7) 其方(二六) | (8) おのれ(三〇) |
| (4) ———— 類型のスタイル(二六三) | (B) 対称——(1) こなた・こなた様(二〇七) | (2) そなた・そなたさま(二三) | (3) 貴様(二六) | (4) 貴殿・貴方・貴公様・貴坊(三三) |
| (5) ———— 西鶴の文体の源泉(二七) | (6) こなた(二〇) | (7) こち・こち共・こちら(九六) | (8) おれ(九七) | (9) 拙者(二〇) |
| | (10) こなた(二〇) | (11) こつち(二〇) | (12) こちら(二〇) | (13) うら(二〇) |
| | (14) こちら(二〇) | (15) 手前 | (16) 此方 | (17) 手前 |

八 西鶴の文体の特色と方法……………一七二

- (1) ———— 西鶴の表現世界(二七) ことばへの美意識(二七)
- (2) ———— 文体の秘訣(二七)
- (3) ———— 乾いた文体・語りの文体(二八)

九 西鶴の漢字用法とかなづかい——〈付記〉表現体系と板元との関連性……………一八五

目 次

六

- (1)——中国の漢字と西鶴(二六五) 西鶴の漢字と字体(二六)
- (2)——西鶴漢字の個別性(二九二) 漢字の使用とその方法(二九三)
- (3)——西鶴の用字法(二九五) 用字とその性格(二九六)
- (4)——かなづかいについて(三〇三)

Ⅲ 基本語彙・諺集	二一五
-----------	-----

一 基本語彙の部	二一七
----------	-----

二 諺の部	三四九
-------	-----

西鶴語彙研究の序章

(1)

言いふるされたことばであるが、〈文は人なり〉という。西鶴の語彙を考える場合、まず第一に、西鶴の爲人^{ひとなり}を一考しておくことが必要であろう。露伴翁は西鶴について、〈自ら恃むこと厚く負る嫌ひの強く、かりそめに人に屈する如き弱き人にあらざりし事は疑ふ可らず^{べからず}〉と評している。さらにわたくしは、西鶴の〈新しがり〉を指摘しておきたい。もっともそれがただちに輕佻浮薄などというのではもちろんない。むしろ進歩的で積極的ないわば進取の気性に富む大阪商人の血が五体をめぐっている。その端的なあらわれが〈阿蘭陀流〉西鶴の出現と存在である。下戸である西鶴と芸風の阿蘭陀流とは、またわたくしと共通するところで、いささか宿命的なものを感じる。西鶴は世人から阿蘭陀流と呼ばれ、自らもそれを標榜して旧態依然の俳諧界へ躍りでた革命児であった。わたくしが好んで引用する俗に〈生玉万句〉(寛文十三年(一六六三))といわれる西鶴自撰の俳書の〈はしがき〉を声高く読みあげて、語彙研究の序章の第一歩としよう。ルビを付し、表記のスタイルをわたくしの読みとるリズムにかえる。泉下の松寿軒、井原鶴永、西鶴翁も赦し給わんことを。

或問 何とて世の風俗しを放れたる俳諧を好るゝや

答曰 世こそつて濁れり我ひとり清り 何としてかその汁を啜り其糟をなめんや

問曰 文盲にしてその功成かたし

答曰 六祖は一文不通にしてその傳を繼 如何してか其分あらん 朝于夕聞うたは耳の底にかひはへて口に苔を生し いつきくも老のくりこと益なし 故に遠き伊勢國みもすそ川の流を三盃くんで酔のあまり賤も狂句をはけは世人阿蘭陀流なとさみしてかの萬句の數にものそかれぬ されとも生玉の御神前にて一流の萬句催し すぎの輩出座その數をしらす 十二日にしてこと早れり 指さして嘲る方の興行へ當る所にし其功ならずと聞しは予かひか耳にやともいへかくもゆへ則座の興を催し髭おとこをも和けるは此道なれは數奇にはかる口の句作そしらは誹れ わんさくれ 雀の千こゑ羈の一聲とみつから筆を取てかくばかり

(2)

〈文は人なり〉につづく第二の要件、言挙げは〈語彙は文体の要なり〉である。西鶴の語彙を論ずるにあたって、何よりも重要なことは、西鶴の文章それ自体への理解である。その点で簡にして要を得たものは幸田露伴の史伝〈井原西鶴〉にくりひろげられた文章論であらう。ここにその一端を紹介しつつ、私見を述べておきたい。

まず露伴翁は、〈西鶴の學問〉についてこう述べる。⁽¹⁾

我思ふに西鶴の學問深遠ならざりしは疑ふべからずといへども、此伶俐の才子、論語大學古今徒然草ぐらゐには其眼を假したるに相違なし。假令西鶴淺學にして誤字を用ゐ俗字を用ゐ假名遣ひをあやまり故事を疋氣筋に用ゐたる事ありとするも、又西鶴を傷つけて骨に徹するに足らず。凡そかゝる小事に嘴を尖らして噉々たるものは、百年を知つて千年を知らざる愚物痴物にして、何人ぞ知らむ萬年の後は此等愚物痴物が揚々として得たりとする所のものも小學生徒の鼻の頭に冷笑し去れんとするものなるを。

さらにへ他の作者は多く學問的の文字を弄す。西鶴は直ちに天才煥發即ち妙文字をなすと。然り西鶴は學深からざりしなり」という。まことに天才西鶴には、學の有り無しは問題外であつた。後世の學者が、西鶴の作品を目前にすえて、やれ古典の、それ中国の、はたまた、印度のなどと、典拠、説話の在り所に目をすえ、思いをこらして、あれこれと詮索する。苔を掃つて暇もなしの至りせんさく、黄泉の鶴翁もさぞかし微笑していることであらう。まして、その文章の可否や、その文の法の正なるか邪なるかをあげつらうのみである。これを愚行とやいうべきか。學者の宿業、かなしき性である。

さて、すすんで、露伴翁は西鶴の文章について一つの論をたてる。つぎのように論じ評して熱つぽく語るのである。

(前略) 西鶴事を記するに多くは比較對照の技法を用ゐて、讀む者をして兩端を敲きて其中の消息を悟らしむ。知らざるものは枝葉多きに堪へずとなすといへども、かゝる所は必らず文勢渾々として西鶴胸中にあり餘りたるものの溢るゝが如し、又讀み了りて後我胸中に止まるは必らず是等の所なり。然らば西鶴遂に我に瘦すことあたはざるか、果して然らば西鶴の觀念は高大か幽深か、我未だ急に議すること能はず。

西鶴の文は自然一家をなす。輕快靈妙、毫も冗漫重複の所なく、恰も片舟に乘て急流を下るに山飛び岩走り、花も草も樹も精しく觀るに違なき所を過て後汪洋たる大海に出で、初めて四顧するに白雲既に來路を埋めて前途は水烟茫々たるを望むが如し。是に於て心を收め眼を瞋し、如何なる所を過しか如何なる山を見しか岩に逢ひしか、如何なる花、草、樹に逢ひ見しかを念ふに、其何の樹何の草何の花、黒岩か紫岩か幾百尺の山なりしかは都て知るあたはざるの中に、唯々仙境の如く美にして奇なりしだけを記得す。再び讀むに當りて若し夫れ流れに溯るが如く遅々として仔細に見來れば、山も岩も花も細草も老樹も皆是れ普通の者にして我熟知せる所のものたるに過ぎず。三度讀むに當りて又流を下る如くすれば、又愈々妙にして前日の未だ見ざりし奇景を得。故に西鶴の文は讀者を載て飛ぶ舟のみ、舟中見る所の山水は相變らずの世界なり、唯此舟に乗つて世界を見るに此世界仙境の如く面白し、是れ此舟の走ること箭の如く飛ぶこと星の如く、一刹那も遲滯緩慢徒らに時を過すことなきに因る、文は是の如くにして妙ともいふべく奇ともいふべし。相變らずの世界を取つて仙境の如く思はしむればこそ妙なり奇なり

り、仙境の如き箱庭を作つて人に示すが如きは兒童の文字のみ。畢竟するに西鶴が文は材を普通に取つて筆を靈妙に運ばず、痴物の望む所は材を奇異に尋ねて筆を靈妙と見られんとするなり。我嘗て人に聞けることあり、下手な料理人に限つて異な魚を喰せたがると。眞に然り、西鶴の如きは蘿蔔胡蘿蔔鯛比目魚何を料理しても能く美からしむるものか。

露伴翁のいわんとするところの一つのねらいは、へ材を普通に取つて筆を靈妙に運ばず、痴物の望む所は材を奇異に尋ねて筆を靈妙と見られんとするの点であらう。西鶴が文章創作において、なみなみならぬ巧手、達人であることを見ぬいてあますところがない。

かまえた一大論文ではないが、さすが露伴翁である。わずか八、九ページにすぎない短い「史伝」の文字の林であるのに、よく西鶴の文章の神髓を感得し、的確なことばで記述している。高く評価されるものであらう。

露伴翁はよほど西鶴を愛し、西鶴が大好きでしようがないという文豪である。同じ創作者のもついわば共感の調べは、とどまらぬ波長を増幅して天空にひびきわたる。もう一つ露伴翁のつづる「井原西鶴を弔ふ文」を全文引用して、序章のしめくくりとしよう。ここでは西鶴の文学と文学史の位置づけまで示し、その死に今もなお万感の憶いを寄せ、涙ほうだとして両眼よりあふれる露伴翁の姿が顕現するのである。

井原西鶴を弔ふ文

愛鶴軒西跡
蝸牛露伴 合作

夫^そつら／＼無漏正法の眼を假りて有爲轉變の世を見れば、滄桑變じ易く金石も保ち難し、一刹那裏の擊電光、忽ち生じ忽ち滅し、阿僧祇劫の汲井輪、何に始まり何に終らむ。悲^{かな}夫^{いかな}、溪河^{たがは}の水は空にうつらふ花を伴なつて殘香去ること早く、野末のあらしは時雨にいためる梢を掠めて爛錦飛ぶこと速^{すみやか}なり。さればや蜜に眠る蜂蝶は閑夢未だ央^{ななば}ならざるに春風既に盡^{つく}るを恨み、露に咽ぶ蟋蟀^{しつしつ}は清吟尙足らざるに秋霜や／＼嚴なるを唧^とつ。悼^{なげ}ましき哉、楞嚴の會^きに古王の歎、おもかげの歌に閨秀の感。さもあらばあれ日月心なくして曾て止まらず、干支^{かんし}則あつて更に緩まらざれば、英雄畢竟馬前の塵、美人多くは是れ泡中の影、消^きて痕なく去つて聲なし、遂に行く道を免れし者もあらねば、頓^{たが}て解けん身を誰か保たむ。嗚呼、嗚呼、狐死して鬼愁ふるは等類の常情、老淚^{はな}びて幼泣くは同胞の通誼なり。況^{いは}や稀世の才子超群の奇翁を、兀然として問へども答へず叩けども應ぜざる一小石塊の前に吊ふに於ておや。

抑々翁の一生を憶ふに、住吉の社前にては連吟二萬三千句、咳唾に珠を飛し氣に香を吐^はれしすさまじさ、梅檀の俳林に木ぶり枝ぶり縱横無盡の筆の跡、或^{ある}は一代男の世の助^{すけ}、二代の世傳、一代より五人女のそれ／＼、義理物語^{ぎりものがたり}の直^すなる、櫻陰祕事の奇なる、武道傳來記の勇ましき、諸國話の不思議なる、文反故のおか

しき、織留永代藏これぞ世の人心、胸算用のきちんと合ふ名残の友、一目玉鋒に英吉利羅馬までの旅日記、俗つれづれに書き残し置土産に一枚あけて

辭世 人間五十年の定まりそれさへ我にはあまりたるにましてや

浮世の月見過しにけり末二年

と見るこそつれなき限りなれ。

竊かに憶ふに足利以來に文字なく、文海の水いとあさく鯉龍も泥に喘ぎたるに、此翁天の命を享け、八斗の才に一管の筆を揮つて、汲どもつきぬ滾々たる泉を爰にそゝがれたれば、八文字屋出で、江嶋屋出で、團水出で、文流出で、都の錦出で、和譯太郎出で、其後京傳出で、馬琴出で、種彦出づ、其間子夏の學三轉して莊周となるが如き傾きありしが皆鶴翁の恩を荷はざるなく、若明らかに門左衛門も翁の弟子ならば詞曲家も亦恩を蒙れりといふべく、鯉鯨蛟螭翁によつて繁殖せり、翁によつて増長せり。翁の功も偉なる哉、大なる哉。されども、嗚呼、嗚呼、已なん哉、已なん哉、花の下に酒を酌で欣々笑ふ者あれども、褪紅の落英を瘞めて酒を澆ぎ奠る者なく、書のほとりに茶を喫して喋々評する者あれども、殘篇の遺功を尊で茶を供し祭る者なし、唉。

今や露伴幸に因あり縁ありて、花無の山邊に西行のむかしを訪ひて粟津の寺裏に芭蕉のおもかげを忍び、

玆に斯に來つて翁を吊へば、墓前の水乾き枯れて、鳥雀いたづらに噪ぎ塚後に苔黒み、霜凍りて屐履の跡なく、北風恨を吹て日光寒く、胸臆悲に閉ちて言語迷ふ。噫世に功ありて世既に顧みず、翁も亦世に求むるなかるべし。翁は安きや、翁は笑ふや、唯我一炷の香を焚き一盞の水を手向け、我志をいたし、併せて同志の句を誦する三四あるのみ、翁若し知るあらば魂尙饗。

大空に羽音も高しなには鶴

西 跡

世の人に長閑與へし鶴の聲

眞 貫

鶴舞ふや御寺聳ゆる春の空

美 雲

九天の霞を洩れてつるの聲

露 伴

○

篇中一調子變りたる所に西跡子の句あり、且つ其邊に翁の著書の名を挿入せるあり、故に圈點を施して人に知らしめんとせり。是れ余の微意なり、看る人笑ひ玉ふな。露伴識

史伝『井原西鶴』とともに、露伴の西鶴觀を知るうえに絶好の文字であり、以下の小論をよりよく理解していただくためにも、あえて論考の序章としておく次第である。

註(1・2) 岩波書店『露伴全集』、(第十五卷・第二十四卷)所収の文による。